

2000年(平成13年)9月20日

アイヌタイムズ第18号日本語版

シケレペ(キハダ)の木

アイヌの人たちは、キハダの実を混ぜ煮に入れて食べたり団子につけて食べました。

キハダの実は、たいへん苦いものです。私も食べたことがありますが、苦いような甘いようなびっくりする味がしました。

川上まつ子さんは、次のように言いました：「キハダの実は私は嫌いだから、混ぜ煮に入れて食べたことがない。おばあさんは、バアソブの混ぜ煮を作るとそれだけをお前は食べてキハダの実を煮るといやがる」といって怒りました。」

青木愛子さんは、次のように言いました：「キハダの実とフッキソウの青い内皮と一緒に煎じて飲みました。心臓の病気や肝臓・腎臓の病気など、何か病気があると飲みました。」

幌別では、キハダの実を煮て潰して、ざるに上げて(漉して)種子を除きました。それを煮詰めて、喘息のときに飲みました。

キハダの木の皮を剥ぎ、黄色い内皮を取って薬にしました。

川上まつ子さんは、次のように言いました：「私の胃が痛むので、キハダの木の皮を煎じて飲みました。」

中本ムツ子さんは、次のように言いました：「おなか痛むと、キハダの木の皮を剥いで黄色い部分をとって、... 細かく削って、水と一緒に飲みました。」

青木愛子さんは次のように言いました：「キハダの内皮を煎じた液を綿や指につけて、湿疹の

ところに塗ったり、唇がただれた時、この内皮を煎じた液を薄くのばして、唇を拭きました。

打撲傷の腫れ物のときは、タンポポを乾燥させて粉にして、これにキハダの皮を煮た汁で練り合わせました。これを腫れたところに付けると良くなりました。冬には、フキやゴボウの葉を乾燥させて粉にして、これにキハダの皮を煮た汁で練り合わせ、湿布薬にしました」

豊浦では、眼が悪くなると、キハダの樹皮を水に浸し、その液で洗眼しました。

キハダの木は学名で、*Phellodendron amurense* Ruprecht と言います(このラテン語の意味は、「アムール地方のコルク樹木」です)。和名はキハダ(ミカン科)です。

キハダの木は、日本、朝鮮半島、中国東北部、ウスリー地方、アムール地方に生えています。山地に生える木で、高さが15mから25mほどになります。

この黄色の内皮は漢方では黄柏(おうばく)と呼ばれ、同じく薬になります。苦味健胃剤とされています。

黄柏成分として、以下のものがあります。ベルベリン、バルマチン、マグノフロリン、苦味質(苦味の元)のオーバクリン、リモニンの他、リノール酸もあります。

ベルベリンというものには、黄色ブドウ球菌、赤痢菌などの菌(悪い病気の元)をなくする作用があると言われています。それは炎症を治す作用もあると言われています。

[横山 裕之] 沙流・千歳